

法華經菩薩思想の研究

—janenti bodhim—

久 保 継 成

1. 法華經の序品、第 13 偈では、菩薩を描写して次のように言う。

.....ye bodhisattvā...../vividhena vīryeṇa janenti bodhim (KN 10. 9~10)

ここで言う janenti bodhim とは、どういうことであろうか。同じ個所が O. では caranti bodhau となっている (ms. *caraṃti*, fol. 17a5-6: cf. SP Index p. 380)。この場合も、ではそれは何を意味するのであろうか。羅什は引用個所を「菩薩種種因縁而求仏道」と訳した。当該個所は「求仏道」である。

2. janenti bodhim ということは、すなおいに受けとれば“(現に) bodhi を生み出す”ということであろう。しかし、問題は当然そう簡単ではない。故渡辺照宏博士は大法輪で「覚り(を求める心)をおこしています」と訳され、(語句)項でこの点に言及して

「菩提心を発することをいう。南条・泉訳“求道せり”はよいが、岩本訳“さとりを生じている”では意味がよく通じない。ボサツはさとりを得る状態にはまだ達していないからである」

と論じている。ところで、この論旨は bodhi を仏陀の境地にのみ帰属させるという、恐らく伝統的なひとつの理解を前提としていると言えよう。しかし、松濤訳「菩提を生起せしめている」は、janenti を使役形ととるか否かの問題は別として、菩提を現実に菩薩によって生み出されるものとして、訳されているととれる。この点、Kern の “who are producing enlightenment...” は明解である (なお, Edg. Dict. p. 237b)。

3. O. の言う caranti bodhau は、ところで、どういうことを言っているのであろうか。“菩提に向って行じている”ととれば、それですんでしまいそうである。しかし、刊本が採用する janenti bodhim が、現実の菩薩の修行のあり方の範囲で言われているとすると、言いかえれば彼岸ではない此岸のこととして述べられているとすると、caranti bodhau も “bodhi に於て行じている” と言っているのではないかという問題が出てこよう。

4. bodhi が於格で出てくる用例を、多少の整理を試みつつ、法華經に見てみよう。

有名な寿量品の自我偈の最後 vs 23 (KN 326. 12) に、

katham nu bodhāv upanāmayeyaṃ..... (以何(令衆生)得入無上道)

とある。この場合、言うところは化城喩品の最後の偈 vs 109 (KN 198. 10) の
sarvajña-jñāne upananti sarvān // (引入於仏慧)

に通じるものと見てよいであろう。

この bodhau や jñāne については、対応する動詞と文節の意味内容から考えて、この於格は少くとも方向性を示すものと理解される。

そこで、まず「に」とか「へ向って」という日本語の概念が無難にあてはめられるであろう。しかし、その際、日本語の「の中で」「に於て」という概念を切り捨てて理解してよいものかどうか、また bodhau や jñāne が精神的領域を言う点から、「に関して」といった概念を無視してよいのかも一考を要しよう。(cf. Speyer's Skt. Syntax § 147)

5. paripācita (pari/pac caus. p.p.p) に関わる用例は数多く現われるが、序品で日月灯明仏の八王子が妙光によって

te tenāiva paripācitā 'bhūvann anuttarāyāṃ samyak-saṃbodhau (KN22.1, 妙光教化令其堅固阿耨多羅三藐三菩提)

とある場合、於格が方向性を示す例と見るべきであろう。“最終目標である無上正等覺に向って”ということである。(cf. Speyer § 146)

しかし、譬喩品で述べられる舍利仏の述懐

paripācito 'haṃ iha agra-yāne (vs 1, KN 61. 7; O. *buddha-yāne*, fol. 66b2; 不失於大乘)

では、“大乘に向って”というよりは“大乘に於て”と言われているととるべきであろう。また從地涌出品で、釈尊が涌出の菩薩について説明して

mayā cāite kula-putrā asmin bodhisattva-dharme paripācitāḥ.....(KN 309.6 令発道意)

と言う際も同様であろう。

ところで、これらの用例での於格の理解を「に関して」という日本語の概念によって試みることは出来ないであろうか。対応する bodhi; agra-yāna (O. *bud-dha-*); bodhisattva-dharma は共に精神的、抽象的概念であり、物や場所ではないのであるから、むしろ「に関して」という概念をあてはめる方が、より本質

的理解と言えそうである。さて、その際には「に関して」がどの例にも通じてあてはまることになる。対応する言葉の意味に応じて、動詞が示す動作的要素の過程に焦準が合されるか到達点に合されるかの違いはあっても、ひとつの精神的領域が於格によって示されていると理解すべきなのではなかろうか。(cf. Speyer §147-9)

6. 5に見た方向性を示す於格の例は *anuttarāyāṃ samyak-saṃbodhau* と *vyākaraṇa* の動詞形との組み合わせで数多く見られ、(e.g. KN 70. 12; 100.3 etc: I. vs 88; III. vs 14 のように *agra-bodhi* の例もある) *praṇidhāna* との組み合わせにも見られる。(e.g. KN 43. 11~12) また

pariṇāmayanto iha agra-bodhau (I. vs 15, 廻向仏道)

のように *pariṇāma* の動詞形も於格をとるのは、「廻向」の意味を理解する上で興味深い。

また例の多い *saṃ-ā-ī/dā* の *caus.* との組み合わせは *pari-/pac*, *caus.* の場合と同様の吟味を要しよう。(e.g. II vv 132; 139; KN 77. 12; 110.7; 183.14; 185.7; 310. 15; 311. 7).

7. さて、4や5で於格が方向性を示すと理解した例は、そこで述べたように *bodhi* 等の語意からではなく、対応する動詞と文節の意味するところから、かかる理解をひき出したのであった。法華經の言わんとするところは、例えば *anuttarāyāṃ samyak-saṃbodhau* とあれば無上正等覺の語意から仏に帰せしめねばならないといった固定的予断をもってしては、理解出来ないと考える。例えば化城喻品に彼の十六王子が多くの *prāṇin* を

anuttarāyāṃ samyak-saṃbodhau pariṇācitavān samādāpitavān saṃdarśitavān saṃ-uttejītavān saṃpraharṣitavān svatāritavān (KN 182. 9-11, 但し *saṃdarśitavān* 等については WT p. 163 note 1; Edg. Dict. p. 568a, 検討は後にゆずる。示教利喜令発阿耨多羅三藐三菩提心)

とある場合、方向性としてとらえたことも、無上正等覺というひとつの精神的領域の中でのことであり、多くの仏ならざる人々がその領域に入ったものとして述べられていることは明白である。

羅什がここで試みた理解は、提婆達多品で天王如来によって

Gaṅgā-nadī-vālukā-samās ca sattvā anuttarāyāṃ samyak-saṃbodhau cittam utp-adayaṣyanty..... (KN 259, 12-13, 恒河沙衆生発無上道心)

と述べられる例など (ex. KN 260. 4-5, 不可思議衆生発菩提心; KN 456, 7-8 衆中八万四千衆生皆発無等等阿耨多羅三藐三菩提心) と通じるものとして原文を読んだもので

あろう。1 にあげた渡辺説と共通のものである。しかし、かかる意識は以下にあげる例には通用しないと思う。すなわち、たまたま什訳に欠ける部分であるが、見宝塔品に多宝仏の次のような述懐がある。

aham khalu pūrve bodhisattva-caryāṃ caramāṇo na tāvaṃ niryāto 'nuttarāyāṃ samyak-saṃbodhau yāvaṃ mayā 'yaṃ Saddharmapuṇḍarīko dharma-paryāyo bodhisattvāvavādo na śruto 'bhūt / yadā tu mayā 'yaṃ Saddharmapuṇḍarīko dharma-paryāyaḥ śrutas tadā paścād aham pariniṣpanno 'bhūvaṃ anttarāyāṃ samyak-saṃbodhau (KN 240. 14~241. 3)

これは明らかに仏果を言う例であるが、仏ならざる人々の場合にもまったく同じ表現が為されている点に注目すべきであろう。例としては提婆達多品の

sarve ca te Mañjuśrīyā kumāra-bhūtena vinītā anuttarāyāṃ samyak-saṃbodhau (KN 261. 14-15, 此諸菩薩皆是文殊師利之所化度)

ye ca sattvās tasya tathāgatasya dharma-deśanāṃ śṛṇvanti sarve te 'vinivartaniyā bhavanty anuttarāyāṃ samyak-saṃbodhau (KN 265. 10-11, 無量衆生聞法解悟得不退転)

をあげることが出来よう。いずれも仏ならざる人々が無上正等覺という精神的領域に“居る”こと、言いかえればそれを確たる信条とする（ことが出来る）精神の状況になったことを述べていると理解すべきものであろう。

8. 7 に示した諸例は、すべていわばお話の中でのものである。しかし、法華經はお話を通してその思想を述べる經である。次にあげる人間の現実を直接述べる例も、これらのお話の中での例をふまえて理解すべきであろう。

pariniṣpannaḥ sa Bhaiṣajyarāja kula-putro vā kula-duhitā vā 'nuttarāyāṃ samyak-saṃbodhau veditavyas……(KN 226. 6-7, 成就阿耨多羅三藐三菩提)

これは法師について説く内容であるが、法師が限定された人でなく、法師の行動を通して新たな法師が生れるべきであるという要請は、次のような文言にも伺い得る。

apy eva nāmāṅka-vāraṃ apīmaṃ dharma-paryāyaṃ saṃśrāvayed yaṃ śrutvā 'prameyā asaṃkhyeyāḥ sattvāḥ kṣīpam anuttarāyāṃ samyak-saṃbodhau pariniṣpadyeyuḥ (KN 228. 1-2, 是人歎喜說法須臾聞之即得究竟阿耨多羅三藐三菩提)

一方、法華經を知らない菩薩について、法師品に仏の言として

evam eva Bhaiṣajyarāja dūre te bodhisattvā mahāsattvā bhavanty anuttarāyāṃ samyak-saṃbodhau yāvaṃ nēmaṃ dharma-paryāyaṃ śṛṇvanti……(KN 233.6 菩薩亦復如是，若未聞……是法華經，当知是人去阿耨多羅三藐三菩提尚遠)

とある。ところで、ここに言うところは安樂行品に、いかなる菩薩乘に属する人にも動揺を起させてはいけなと説き、言うべきでないことの中に

dūre yūyaṃ kula-putrā anuttarāyāḥ samyak-saṃbodher na tasyāṃ yūyaṃ saṃd-rśyadhve / (KN 285 .9, 汝等去道甚遠)

とあるところから明確になる。ここで tasyāṃ は明らかに阿耨多羅三藐三菩提である。引用箇所後半は“そこには見られない”すなわち“その領域には居ない”ということである。dūre とは単に仏果から遠いということではないのである。

以上、anuttarāyāṃ samyak-saṃbodhau は現実の人間がその中に心を置くことの出来る精神的領域として、述べられていると言えるのではなからうか。

9. さて、ここで改めて bodhi が現実のものか彼岸のものを、用例にそって見てみよう。

caranti ete vara-bodhi-cārikāṃ (V. vs 44, KN 131. 12, 汝等所行 是菩薩道)

sthito 'smi bodhaye (IX vs 7, KN 219. 10, 我今……安住於仏道)

kena bodhiya sthāpitāḥ (XIV vs 25, KN 306. 3, 誰……教化而成就 從誰初發心?)
などは話の流れの中の現在に於て bodhi がとらえられている例と言えるであらう。

te sarvi bodhāya abhūṣi lābhinaḥ (II vs 76, KN 49. 14 etc, 皆已成仏道)

te sarvi prāptā imam agra-bodhim (II vs 96, KN 52. 10, 自成無上道?)

もこれに準じて考えられよう。また

samādapemī aham agra-bodhau (II vs 139, KN 58. 8, 但以一乘道 教化諸菩薩)

te cōdārāyāṃ buddha-bodhau samādapitāḥ (KN 110.7, 然仏実以大乘教化)

sattva-koṭī-nayuta-śata-sahasrāṇi bodhāya samādapitāny abhūvan (KN 183. 14, 所化六百万億那由他……衆生)

paripācitāḥ sarvi mayāti bodhaye (XIV vs 38, 悉是我所化 令発大道心)

などの例も、bodhi という精神的状況がその人々のものになっていることを言っているとするべきではなからうか。

10. caranti bodhau についての結論を出す前に ✓car が於格をとる例をこの経に見ておこう。

caritās ca jñāne (XIV vs 37, KN 309. 15) ; pañcasu pāramitāsv..... caret (XVI. KN 332. 10) ; samādhau carito 'bhūt (XXV. KN 464. 2).

これらの例は、修行として現実にとりくんでいることがらを於格で表現することを示している。

caranti bodhau は“bodhi を行じている”のである。“bodhi に関して、に於

て行じている” のであり “行じることを通して bodhi をつかむ、つかんでいる” のである。

11. では現実に修行者が bodhi をつかむとは何を意味するであろうか。一人の人間の内面において、bodhi と表現される精神的領域が実感されるということは、より現実的にとらえれば、その人間が精神的に何かを生み出すということであろう。喜びかもしれない、悲しみかもしれない、何らかの実感を通して、しかし普遍なものが見えた時、さとれた時、ネパール系写本の janenti bodhim という表現は確かな響きを持つに違いない。

以上、他の経典における context との異同については、諸賢の御教示をあおぎたい。

〈キーワード〉 菩提，法華經，菩薩行

（国際仏教学研究員・立正大学講師・文博）

— Announcement —

33rd International Congress of Asian and
North African Studies

on the campus of the University of Toronto

August 19-25, 1990

With the program theme
“Contacts between Cultures”

To receive future mailings concerning the Congress please write to the Secretariat, 33rd International Congress of Asian and North African Studies, c/o Prof. Julia Ching, Victoria College, University of Toronto, Toronto, Ontario M5S 1K7, Canada.